

国際環境マネジメント 参加学生レポート

岩田 祥子 環境生態学科
藤井 佳祐 生物資源管理学科

2013年度の国際環境マネジメントは、ベトナム・ダナン工科大学との共同プログラムとして、3月2日から12日にかけて実施された（表1、図1）。

表1 国際環境マネジメント（ベトナム・ダナン）実施スケジュール

	午前	午後	夜
3/2	日本を出発		ダナン空港に到着。オリエンテーション。
3/3	開講式。日本の環境問題についての概説。	ワークショップ1。ベトナムの環境問題についての概説。	
3/4	講義（廃棄物、下水処理）	フィールドワーク（廃棄物処分場、下水処理場、河川の下流部）	
3/5	講義（森林管理、水質問題）。	フィールドワーク（ダナン郊外）	
3/6	フィールドワーク（水源林とダム・移転集落訪問）		
3/7	フィールドワーク（ダナン農村部）	フィールドワーク（世界遺産ホイアン）	
3/8	講義（環境問題）。ワークショップ2。	ワークショップ2	ワークショップ2
3/9	フィールドワーク（ダナン市街）		
3/10	ワークショップ2	グループごとのワークショップの結果についてのプレゼンテーションおよび討議	
3/11	閉講式、修了証書授与式。	昼食会、自由時間	ダナン空港から出発
3/12	日本に到着		



図1 A) 両国受講生のベトナム料理夕食会



B) 修了証書を受け取った両国の受講生

岩田祥子

滋賀県立大学では、国際環境マネジメント（現：国際環境マネジメントⅠ）という人間学科目を開講

している。アジアの環境問題について実際に現地に行き、講義、フィールドワーク、そして現地の大学生との議論を通して学ぶ授業である。私は2013年3月2日から3月11日にかけて、ベトナム中部の

ダナン市（人口約 100 万人）で行われた授業に参加した。ダナンはベトナム中部の中央直轄市で、日本の企業も多く進出している産業都市である。

今回のプログラムには、様々な学年、学科から合計 13 名が参加した。日本での事前授業では、ベトナムの自然や環境問題について学び、英語での自己紹介の練習を行なった。

次にダナンでどのような活動をしたのかを具体的に紹介していく。私は友人とプログラム開始の 5 日前から中部の古都フエを観光し、プログラム開始の夜にダナンのホテルで全体に合流した。プログラムの前半で、日本とベトナム、滋賀とダナンそれぞれの自然環境や抱えている環境問題及びその解決策について、講義を受けた。またフィールドワークの最初に、ダナン市から出されたごみの埋め立て場と下水処理場を見学した。ダナンでは、病院や工場から出される危険ゴミ、それ以外の 2 種類しかごみを分別しない。毎日大量のゴミが埋め立て地に運ばれており、数年後に満杯になってしまうと説明を受けた。埋め立て地には悪臭が漂い、ハエや蚊が飛んでいた。ごみの山の中で、再利用できるものを探している人がいたのが印象的だった。生ごみを焼却せずに埋め立て地へ運んでいるため、そこから浸出する汚染水も問題となっていた。下水処理場も、ダナンの人口に対し規模が小さすぎて処理が追いついていなかった。ベトナムには雨季と乾季があり、雨季に大量の雨が降ると、処理前の下水がプールからあふれてしまうことも問題となっていた。

私は下水処理場を見学している途中から体調を崩してしまい、一晚診療所のお世話になったため、翌日のダムサイトでのフィールドワークには参加できなかった。このフィールドワークは、悪路を長時間バスで移動し、大変だったそうである。診療所でいただいた食事はベトナムらしくフォー（米粉でつくった現地の代表的な麺）とドラゴンフルーツだった。

さいわいすぐに体調が回復したので、その次の日にはダナン郊外の農村地域に行き、ベトナムの学生の実家にあるキノコ栽培場を見学させていただいた。日本でもキノコ栽培場を見学する機会はあまりなかったので、珍しかった。キノコは光と湿度の管理をしっかりと行えば、比較的簡単に栽培することができるそうだ。

ホテルから大学へは毎日徒歩で通っていた。歩きながら、ベトナムの環境問題について考えた。歩いていて気になったのは、道に捨てられているゴミの多さである。野菜くず、食べ残し、新聞、空き缶、ビンなど様々なものが落ちていた。ベトナムでは屋

台や、食べる場所を外に設けている店が多いが、そういった場所では、肉を食べた後の骨や果物の皮がそのまま道に捨てられていた。日本の都市では考えられないことだ。また、空気の悪さも気になった。ベトナムでは多くの人バイクで移動している。排気ガスや砂ぼこりが日本よりもひどく、街中を歩くときはマスクが欠かせなかった。ベトナム人もバイクに乗るときはマスクをつける人が多く、様々な柄のマスクが売られていた。

後半はダナン大学の学生と滋賀県立大学の学生で 4～5 人の班を作り、プログラムの最後に行うプレゼンテーションを目標に話し合いをした。話し合いのテーマは、現在のダナン市の環境問題と、その解決策である。今回の講義やフィールドワークで学んだ事、それぞれの大学の授業で今まで学んできたことをもとに話し合いを進めた。私の班ではごみ問題を取り上げた。現地の学生達から話を聞くと、講義やフィールドワークでは知ることが出来なかったことも分かってきた。ごみ回収車が時間通りに来ないことや、都市と農村の処理方法の違い、日本人とベトナム人のゴミに対する意識の違いなど、具体的に細かい話を聞くことが出来た。数日で答えを出せる簡単なテーマではなく、考える程に解決策なんて無いように思えるときもあったが、何とか協力して自分たちなりの結論をだし、プレゼンテーションを行うことができた。

ここまで勉強の事を中心に紹介してきたが、もちろんベトナム観光も楽しんだ。古い町並みの残るホイアンや、ダナン博物館（なぜか全館照明が消えていた）を見学した。ベトナム人は日本人と同じ米食で、魚もよく食べることもあり、料理はどれも食べやすく美味しかった。

ダナン大学の学生や先生とは全て英語でのやり取りだったが、日本人もベトナム人も英語が母国語でないからこそ簡単だったこと、難しかったことがあった。簡単だったのは、相手も母国語でないためゆっくり話してくれることと、簡単な単語で話してくれること、俗語を使わないことであった。難しかったのは、それぞれがジャパニーズイングリッシュ、ベトナムイーイングリッシュを使っているのも、同じ単語を言っても全く発音が異なっていた点である。ベトナム人らしい英語になれば、相手に合わせて発音すると通じやすいことも分かった。

国際環境マネジメントの授業では、現地の学生と文化交流をするだけでなく、環境問題という一つのテーマ、しかも自分たちの専攻で常から考えていることについて共に学べるのが大きな特徴である。食事の時間などももちろん楽しかったが、私は話し合

いの時間に一番ダナン大学の学生と仲良くなれた気がする。

頭と体を存分に使い、あっという間の充実した10日間であった。このような素晴らしい機会を得られたことに感謝し、今後の勉強に活かしていきたい。

藤井佳祐

国際環境マネジメントに参加した動機は、第一に現地の大学生と英語でコミュニケーションをとりながらスキルアップできること、ベトナムのエキゾチックな雰囲気に興味があったことである。事前学習では旅の心得、ベトナムの基本的な地理情報や自然環境について学び、英語での自己紹介も練習した。これらは英語でのコミュニケーション能力だけでなく、外国の環境に関する知識を身につける良い機会になった。

現地でのコミュニケーションはほとんど英語を用いて行った。普段から英語の勉強をしていたので、現地の大学生と会話することに不安はなかった。しかし実際に会って話してみると、彼らの英語に強いくせがあり、当初は聞き取るのにかなり苦労した。東南アジアの英語はネイティブ英語と全然違うと聞いてはいたが困惑した。会話での表現も独特で、相手の意思を理解するのに苦労したものの、いろいろと話しているうちに慣れていった。日本のマンガやアニメはベトナムでもよく知られているので、その話題でとても盛り上がった。最初は英語による会話だけで意思表示をしようと努めたが、現地の学生と長時間話しているうちにボディランゲージを交えることが増えていった。目的のための英語でなく、手段としての英語を学ぶことを体感したこの経験は、私にとって非常に価値のあるものだった。なれてみると現地の学生は実はみな英会話が上手だったので、自分自身ももっと頑張ろうという刺激をもらったのが良かった。

現地では様々な場所を訪れることができた。基本的に午前中は講義を受け、昼からフィールドワークで市内を巡ることが多かった。ゴミ処理場では、大量に積み上げられたゴミを見た。ゴミ焼却施設の数が少ないため処理が間に合わないという話であった。下水処理施設もゴミ処分場のすぐとなりにあり、石造りの曝気槽の中で汚水が好気バクテリアの酸化分解によって処理されていた。設備は野外に解放された状態で、汚水が攪拌されると白い泡がたち、それが風に乗って舞い上がり、周辺を漂っていたこと

を覚えている。この施設も処理容量が足りないようだった。山林地帯には、所々はげ山が見られた。日本では耕作放棄地が増加し森林を管理できないことが問題であるが、ベトナムでは過度な伐採（ベトナム戦争の影響もあるかもしれない）で適切な森林管理ができていないところがあるなど、現地の環境問題を数多く知ることができた。山林地帯では少数民族の方々へ取材もでき、日本では普段見られないような光景にであうことができた。1人で旅行していると体験できない経験を授業の中で積ませてもらったことに感謝している。

自由行動時間も多く取ることができた。夜に繁華街で食べ歩くこともできたし、授業開始前の早朝に近くのを市場を楽しむ自由があったことが嬉しかった。露店で買い物する時の価格交渉は奥が深かった。初めて買い物をした時はプレスレットを通常の5倍ほどの値段をふっかけられたことに気づかずそのまま買ってしまった。ダナンの学生に「半分以下に値切るよう」アドバイスをもらい、それからは値切りの駆け引きを楽しんだ。また、現地のおじさんにバイクに乗せてもらったが、降りたときに高額な金を要求されたことも、今は良い経験だったと思っている。ダナンの学生曰く「値段交渉してから乗せてもらう」ということらしい。日本と異なる文化を存分に楽しめた。

最終日には今までベトナムで目にした様々な環境問題に対しての解決策をダナンの学生と話し合い、その内容を発表した。ダナンの生活環境は日本と比べると問題が多いと感じた。具体的な解決策を模索する時は、ベトナムの経済に照らし合わせながら対策を練ることが鍵となるが、実現可能なアイデアを出すことは難しかった。私の班では、ゴミ処理場と下水道処理施設、そして街のゴミの散乱状況に対しての解決案を考えたが、ゴミ焼却施設を増やすことや下水処理施設を増やすことに留まり、ベトナムの財政事情を考慮できなかった。

環境問題は国が変われば、その解決策も変化する。日本では下水処理やゴミ処理などの衛生面がしっかりと管理できている。日本の環境の保全は衛生的な環境づくりに留まらず、希少生物の保全も視野に入れている。環境保全の基盤が整い、人間以外の生物の保全にも力を注いでいる。ベトナムは今、日本の高度経済成長期の過程と同じような状況にあると思う。環境問題を受け止め、それを解決するための研究が盛んであるように見えた。環境問題を日本の場合と違う視点で見ることができたのは貴重な経験だった。